

89 伊達政宗の遣欧使節船の 船名・船型

問 支倉常長の乗船した船の名が、陸奥丸とも、洗礼丸とも呼ばれています。また船型が、スクーナ
(1)
とか、ガレオンといわれています。余りにもまちまち過ぎますが、一体どれが本当なのでしょう。

答 使節船に関する信頼し得る資料としては、西欧側のものが殆どで、日本側のものとしては、僅かに「貞山公治家記録」の簡単な記述があるだけです。それらの資料の検討と、従来試みられたことのなかった船舶専門家の新しい研究成果とを総合しますと、船名に日本名はなく、西洋名はサン・ファン・バプチスタ Sant Juan Bautista、船型はナベツタ naveta 乃至ガレウタ galiota となります。「貞山公治家記録」巻之23慶長18年〔1613〕9月15日の条に『此日南蛮国へ渡サレル黒船牡鹿郡月浦ヨリ発ス……』。「南蛮使節の船」(小倉博、「仙台郷土研究」第12巻第2号の内)に、『南蛮使節の船の日本名は何の記録にも見当たらない。単に船と記したものが多く、或は大船・黒船と記したのである。黒船とは一名南蛮船ともいひ、南蛮人が乗って我が国に渡航した大船で、その色から称するのだといふ。然るに1617年3月13日附、新イスパニヤ総督がメキシコからイスパニヤ国王に上った書翰〔「大日本史料」第12編之12、欧文材料234号〕の一節に『三月一日附グワダハラ市長の書翰により、陛下の日本国王への贈物を塔載して、二年前アカブルコ港を出帆せしサン・フワン・パウチスタ号のチントケ湾に入港せしことを聞きたり』とある。このサン・フワン・パウチスタ号 Sant Juan Bautista が仙台の黒船の西洋名である。西洋型の船であり、南蛮人が操縦して南蛮国へ行くのであるから、船名も南蛮風で、別に日本名は無かったのかも知れない』。「ベアト・ルイス・ソテロ伝」(ロレンソペレス著、野間一清訳)にも『……月の浦で建造された「サン・ファン・パウチスタ」号に……』とあり、また、遣欧使節に関する代表的な著作である「伊達政宗南蛮通信事略」(大槻文彦、明治34)にも「船」と称しているだけで、その他の諸書にも、日本名を記したものはありませんでした。陸奥丸^{×××}とか、伊達丸^{×××}とか、仙台丸^{×××}という無責任な呼び名は、昭和に入ってから横行し始めたもののようです。「伊達政宗欧南遣使考全集」(伊勢斎助編、昭和3刊)に『然るに大黒船(陸奥丸)月の浦を解纜して後…』などと現われています。最も甚しい害毒を流したものは、昭和4年に突然提起された「山下書簡」・「館様造船模様」等の矛盾、作為に満ちた偽作史料が流布されたことで、「陸奥丸」という誤まれる俗称を一層拡散させました。このような名称は現代感覚からすれば、如何にも使節船の船名として、尤もらしくふさわしくとられますが、伊達家の伊達、官名陸奥守の陸奥が忌詞であって、物の名に取って付けられ呼び名とされるなど、思いもよらぬ厳しいタブーとされた時代に、およそあり
(5)

得べからざることであります。この点からも^{×××}陸奥丸・^{×××}伊達丸の船名は絶対否定することができるとともに、このような初歩的知識の欠除さが「山下書簡」・「館様造船模様」の偽作性を益々濃厚にするものであります。また、洗礼丸とは、「仙台領キリシタン秘話興隆篇」（紫桃正隆）に『従来は「大黒船」〔船名ではない〕「伊達丸」「陸奥丸」などの名で呼ばれていたが何れも俗称。異国の資料に記録された、いわゆる公式の呼び名は、「サン・ファン・バプチスタ号」つまり「洗礼号」とするのが正しい。』と、俗称を排撃した著者が、「洗礼号」という俗称を立てています。ところが、この俗称が割に最近の出版物や新聞・放送で通用しているのを見ますが、これは、イスパニヤ名サン・フワン・バプチスタ Sant Juan Bautista の無知な訳から発生したもので、これこそ排除すべき誤称であります。Sant は Saint [英]、Juan は John [英]・Jean [仏]・Johannes [独]・Iōannēs [希]、Bautista は Baptist [英] で「洗礼号」の訳は出⁽⁶⁾てこないし、最も肝心なことは「^{×××}洗礼号」は、断じてこの船の日本名でも何でもないことであります。

次に船型について、「貞山公治家記録」巻之23慶長18年9月15日の条に『右船横五間半長^{××××××××}十八間高十四間一尺五寸アリ帆柱十六間三尺松ノ木ナリ又弥帆柱〔やはばしら〕モ同木ニテ造ル九間一尺五寸アリ……』とあることから、本帆と弥帆との⁽⁷⁾両帆柱を有する西洋型帆船であると速断した⁽⁸⁾らしく「伊達政宗南蛮通信事略」（大槻文彦）が『⁽⁹⁾両桅船（スクーネル）ナリ』としたのがスクーナー説の始まりとされます。スクーナーは18世紀〔1713〕に、アメリカのマサチューセッツ州グロスターで最初の2檣スクーナーが建造されたのが起原で、17世紀初頭の使節船時代にはまだ開発されなかった船型です。わが国においては明治時代に北海道から東北地方にかけて、スクーナー建造が盛んに行われ、洋船即ちスクーナーとされるほど普及したといわれます。「伊達政宗南蛮通信事略」は丁度この時期に書かれたもので、一方「貞山公記家記録」は、使節船建造の慶長18年〔1613〕から90年の歳月を隔て、元禄16年〔1703〕に編纂されたことと、その編者が洋船の知識に暗かったため、前檣・本檣・後檣の3帆柱のうちの前檣14間1尺5寸を単に『高十四間一尺五寸』（船体の高さを読み取れるが、長さ18間の船体にこのような寸法の高さはありません。）と誤記したため、2本帆柱の洋船のデータとなってしまう、大槻文彦のスクーナー説が出たのであるというのが専門家の見解であります。ところで、使節船の大きさについて、ソテロが「五百屯以上ある奥州の王の船」といっているのは「貞山公治家記録」の長さ18間、横幅5間半の寸法から計算した概略の屯数とはほぼ一致する点で重要性があり、この屯数がナベッタという船型にふさわしい大きさだとされます。それとともに、船型推定のための有力な絵画資料があります。その一つが、早くから使節船を描いたものとして注目されているアカプルコの風景画で、「日本海外発展史」（西村直次）や「図説日本文化史大系」第7巻等に紹介されているものであります。

使節団が入港した1613年及び1619年当時のものであるので、資料価値の高いものとされます。船舶専門家によると、ここに描かれている「日本からきた船」は、まさしく前檣と本檣は2段の横帆、後檣は1枚の三角帆を特徴とするナベッタ乃至ガレウタ船型であったといわれます。

注(1) 諱は常長、初め与市、次で五郎右衛門と称し後に六右衛門と改めた。政宗に従って軍事、外交の手腕を大いに発揮した。慶長18年48才の時南蛮遣使の正使を命ぜられた。9月15日月の浦を出帆、太平洋を横断しノビスパンを經由、イスパニヤに入り、ここで洗礼を受けドン・フィリッポ・フランシスコの洗礼名を授かった。それからローマに入り、法王に謁見し国書を捧呈し、市民権を与えられた。しかし遣使の目的は達成できずに帰途につき、元和6年〔1620〕8月26日月の浦に帰着した。出発以来7周年であった。その2年後の元和8年〔1622〕7月1日悲運のうちに52才で死去。その後鎖国の歴史の中に全く埋没し、明治の初その名が顕彰された時、墓所の所在〔通町光明寺〕すら忘れ去られていた程であった。なお、遣欧使節関係資料は仙台市博物館に収蔵されている。

注(2) 「伊達政宗の遣欧使節船の船型などについて」（石井謙治、「海事史研究」第8号の内）

注(3) なんばん。ポルトガル、イスパニヤをいい、キリシタンと同じ意味に用いられた。これに対しオランダ人を紅毛といった。

注(4) 昭和4年8月、当時の友好国イタリー駐日大使の、使節船出帆地月の浦来訪を契機として、地元石巻町が使節船の復原模型をムッソリーニ首相に贈呈する企画が立てられた。その時、その船型が問題となり、同町長に対し参考資料として、雄勝の山下慶助氏が寄せた資料。同氏の主張によればこれは雄勝浜金剛院の旧記「風土記」〔?〕の中から某氏が筆写して置いたものだという。原本は明治29年5月5日の三陸津波で流失してしまったというが、津波のあったのは6月29日である。ところが某氏は、原本の行方について流失説を公表してから僅か半年後には、前言をひるがえし金剛院の別当が何処かへ散逸させてしまったのだともいっている。この点でも極めて明朗さを欠き、確実な典拠史料もなく、天明5年〔1785〕創製の「松右衛門帆」、幕末以降に洋船肋骨の和名となった「間連」〔まつら〕、18世紀アメリカマサチューセッツ州起原の「スクネル造り」等後世の新規な事項が混入しているため、矛盾不合理そのものともいうべき、作為の跡の歴然たる明治頃の偽作である。これに対し厳正な検討を加えることなく、全く鵜呑みで世間に流布されたため、誤まった陸奥丸、^{×××}スクナー^{×××××}説を拡大した。

注(5) 「仙台魚風土記」（佐々木喜一郎）に『そう多くとれぬ魚だが、その地方名は昔かたぎをあらわして、ロク又はロクノウオという。初代政宗公が慶長13年〔1608〕陸奥守任官以来代々の藩主が陸奥守であったところから、たとえ魚であってもムツと呼び棄て

るを遠慮してである。『冠独歩行』に、「是非もなや、殿の名を呼ぶムツ売の……」とあるが、仙台では決して「是非もなや」で片付けはしなかった。川柳にも「明けろくと仙台様に高尾いひ」と、時刻を呼ぶにさえ「六つ」とは言わなかったのは、さすがは松の位の高尾大夫である。仙台では、これが歴々大身〔正しくは大進〕にも及び、仙台騒動の立役者、涌谷の伊達安芸の領内では、アキ（秋）といわずに「小春」といい、佐沼の亘理家は代々伯耆を官名としたので箒をハハキ、亘理の伊達家では成実以来安房の名を世襲したのでこれを憚って粟を作らないし、これをキガネ（黄金）と呼ぶ。又松山町では主が茂庭周防なので染料の蘇枋（スオウ）はソメキという。柴田郡の川崎では初代の伊達宗高が右衛門大夫であったところから衣紋竹を「衣裳かけ」と呼ぶ慣わしであったという。等々。しかし事實は、殿様の御名を下々で遠慮したとばかりはいきれない。実は上よりの御達によるものであったと思うのは、殿の名を物名にして検挙乃至処罰された記録もあるからである。先ず菓子名では、仙台の南町で「陸奥の花」という看板をかけたかどで、大町一丁目の岩淵屋善七借家富七なるものは「陸奥信夫せんべい」、南光院の門前で「陸奥野田せんべい。陸奥玉川千鳥焼」を売った為に、等々。或は松島で、土産品の瀬戸物に陸奥と名付けて売っていた事などから、町年寄や五人組の者までが呼び出されて嚴重に説諭をされ、その撤去を命ぜられている。これが更に世子の名にまで及び、大町五丁目で「美まさか餅」として売出したが、世子が元服して代々美作守に任ぜられるを例とするに迂濶にもこれを餅の名にしたというので、小人目付に不丁法至極なる者として摘発された者が、寛政2年〔1790〕にあったという。然しこんな例は、独り仙台ばかりでなく、他藩にもあった事で、それが明治の代になっても華族の間等にはあったとか』。「伊達家史叢談」卷之1（伊達邦宗）に『家臣ノ藩公ヲ尊敬スルノ大ナル、君公ノ尊名ヲ称シ奉ルヲ憚リ、……又例ヘバ書中ニ伊達政宗ト云フ文字ヲ散見スルモ、文字通り読下スコトヲナサズシテ、之ヲバ我公〔わがきみ〕ト代ヘテ読ミタルモノナリ。……』。ほかに「宮城県史」第20巻 p161、「仙台郷土研究」第5巻第6号・第10巻第3号・第10巻第6号参照。

注(6) ユダヤの予言者。神の国の近きを予言し、ヨルダン河でイエスをはじめ多くの人に洗礼を施した。ヘロデ王に斬首された。

注(7) ほんぼ。大船の中央の帆柱にかける帆。

注(8) やほ。大船の舳〔へさき〕の方に張る小さい帆。〔この船の場合弥帆ではなく実は後帆をこのように誤ってしまったものようである。〕

注(9) 両桅船〔りょうきせん〕の桅は帆柱のこと。2 檣をもつ縦帆装置の西洋形帆船。わが国の工匠が最初に建造したスクーネルを君沢形〔きみざわがた〕という。幕末にロシヤ使節ブ

チャーチンに雇われ、その指導のもとに、造船の経験ある伊豆国君沢郡〔現田方郡〕戸田〔へた〕村の木工・鍛工が建造し、安政2年〔1855〕に竣工したもの。以来幕府によってこの軽快な帆船は、スクーネル型とか君沢型と呼ばれて建造されるようになった。明治時代に入ると全国的に普及し、在来の和船に取ってかわり沿岸航路の主役として活躍した。

資料 貞山公治家記録巻之23

伊達政宗の遣欧使節船の船型などについて（石井謙治、昭和42年4月発行「海事史研究」の内）〔この論文を簡約した「サン・ファン・バプチスタ号の船型」が、この事例集初版発行の2年後の「支倉常長伝」（支倉常長顕彰会、昭和50刊）に寄せられている。〕

仙台郷土研究第12巻第2号

東北キリシタン史（浦川和二郎）

慶長使節（松田毅一）

90 仙台城下に起った二大騒動

問 藩政期の仙台城下に、前後二つの大騒動があったというが、それは何々か。

答 城下建設途上の慶長7年〔1602〕に起った「御小人〔おこびと〕騒動」と、終末期に入った天明3年〔1783〕に勃発した「安倍清〔あべせい〕騒ぎ」とを2大騒動に数えています。ともに人心を震撼すること甚大で、前者は大量流血の惨を現出するに至り、後者は飢餓に瀕した大衆の暴発した打こわし騒ぎでした。

御小人騒動は、慶長7年3月16日、仙台城下建設の最中、茂庭綱元屋敷前〔現仙台大神宮敷地一帯〕の堀普請に使役されていた御小人と、普請総奉行金森隠岐・勘平父子との争に端を発し、小人の集団と上士側とが武力で対決し、遂に小人側が全員打ち果たされた事件です。これについて、「貞山公治家記録」巻之21、慶長7年3月16日の条に、次のような詳述がなされています。その詳細さは、この事件の重大性を意味するのか、他の記述とのバランスを失っている程であります。『此日辰刻仙台ニ於テ茂庭石見綱元屋敷ノ前御堀普請場ニ於テ御小人ノ者共御普請奉行金森勘平（諱不知）ヲ撃殺ス其故ハ金森勘平父子普請奉行トシテ御小人等マテ罷出人夫ニ雑テ御普請ヲ務ム今朝堀ノ内ニ一人臥居タル者アリ隠岐見テ人足ナリト思ヒ即チ執縛ス其後隠岐ハ石見宅ヘ行ク時ニ